



先月の山行

- ☆ 9月11日 (日) 岩ごもり山 山行報告参照
- ☆ 25日 (日) 武奈ヶ岳 山行報告参照

10月の予定

- ★ 13日 (木) 例会
- ☆ 16日 (日) 称名滝
CL 宮本重信
- ☆ 30日 (日) 倉ヶ岳 獅子吼高原 7時30分
CL 宮本重信 登り2時間半 危険なし

11月の予定

- ★ 10日 (木) 例会
- ☆ 13日 (日) 大師山 勝山 登り3時間危険なし
- ☆ 27日 (日) 鷲鞍岳 九頭竜 登り2時間危険なし

12月7日 (水) 忘年会 マルハチ
幹事 宮本重信

山行申込み方法

- ・山行申込みの基本は例会時です。
(都合により例会に出席できないが、山行込みをした場合は、例会当日20時半頃、宮本の携帯090-8260-8108へ連絡してください。)
- ・例会時に未定であったり、山行申込済で都合によりいけなくなった場合は、前々日夜までに山行リーダーへ直接連絡してください。

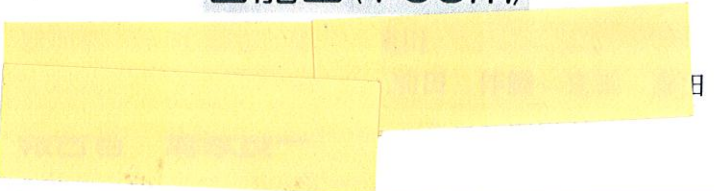
山行計画書を提出して下さい

クラブ山行の場合はリーダーが、個人山行の場合はそれぞれで山行前日迄に宮本会長まで。

山行報告

2016年9月11日

岩籠山(765m)



台風の影響で、毎日の天気予報がコロコロと変わって不安な日々が続きましたが、私の日頃の行いが良いので晴れました(笑)当日は雪研に6時30分に集合。予定していた人数よりも多くの参加人数となりました。早速、車2台で敦賀に向けて出発です!

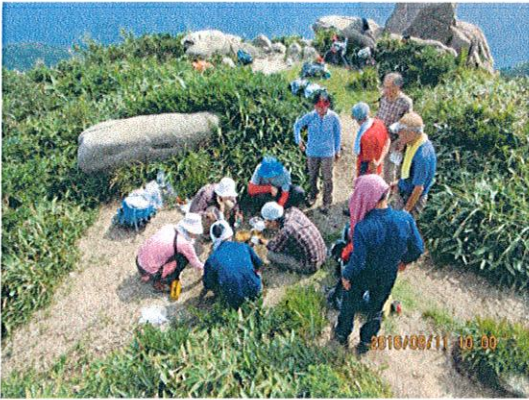
今回の予定はCLが作った山行計画書では岩籠山縦走です。ドライブインしのはらからの駄口コース~ブナ林~インディアン平原~岩籠山山頂、下りは沢沿いを歩く市橋コース~疋田駅となっています。車もドライブインと疋田駅に置いての作戦です。車の移動は畑中さんと大越さんに任せて、足の遅い私はさっさと登りはじめました。ほどほど進むと斜面があり、時々日差しもあってスグに汗が出てきました。

しかし、先週登った越前甲よりは楽で、やがて尾根歩きとなって爽やかな風も吹いています。やがてブナ林に入っていました。ブナ林って、いい感じの景色やなあ~と思っていたら突然の下り!40~50m程下ってまた上り!ヒーハーになって登ると白い奇妙な岩が見えてきました。ココが有名インディアン平原!副会長が「あの岩陰からインディアンが出てきそうやろう!」と言っていました。昔の人はそんな風に見えて思った

「山行報告」

武奈ヶ岳 1214m

2016年9月25日 晴れ



のかと考えて岩に登りました。岩の上に立つと敦賀の町並みと敦賀湾が見え、インディアンのように叫びたくなりましたが、迷惑になると思い諦めました。時間が早かったのですが、早速、伴籐さんがザックから大きな鍋を2つ出してきました。

今回のレシピはカレーうどんです。しかも中辛と大辛の2種類です！伴籐シェフの指導の下、みなさん必死で作っていました。出来上がったカレーうどんは、和風だしとスパイシーな味付けで、野菜と豚肉と薄あげの入った豪華なカレーうどんでした。とろみも最高です！当然、2種類を食べ、なおかつ、当たり前のようにおかわりをしてお腹いっぱいになりました。ありがとうございます。

しばらくして、大越さんからマラソン大会の楽しみ方講座を聞いて過ごし、それから山頂を目指します。今日は時間があるので大岩に行ってから山頂に行きました。山頂はそれなりに、蒸し暑いのでスグに下山しました。途中で普通、そんな所から降りない所をショートカットしました。山を知っているから出来る技やなぁと感心しました。やがて、沢沿いを歩き、沢渡をしてなんとか下山する事ができました。それからの疋田駅は遠く、暑いアスファルトの道で、ソフトクリームの幻覚を見たりして辛かったです。帰りはサンピア敦賀のゆったり広めの温泉に入ってさっぱりしました。

後は帰ってビールを飲むだけです！今回も楽しい登山でした。ありがとうございました。



6時に県雪対策研究所に集まり、8時ごろにガリバー青少年旅行村に着いた。天候は晴れ。武奈ヶ岳には2年前今頃登った覚えがある。駐車場から標高差は750mぐらい。この山は花崗岩からできていて砕けやすく至る所で崩落跡がみられた。この間雨が続き谷川の流れが激しい。

川沿いに登るとしばらくして八淵の滝にやってきた。川床の石は白く、水が凄く綺麗だ、苔が生えていない。

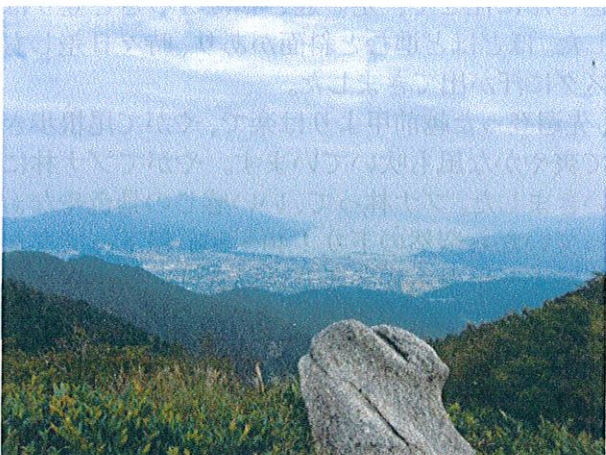
登山口から「登山への注意喚起」の掲示がしつこい。過去に2名の遭難者が出たという物騒なコースである。

今回は10名の山行、どことなく不安である。というのは、この山に登山する度に、下り道しかもガリバー青少年旅行村近くでのハプニングがあるからである。最初は、沢道で頭からひっくりかえる、2度目は、細かく砕けた山道で脚をとられ大きく躓くなど大きな怪我はなかったもののハプニングが起こっている、2度目は私である。今回は何事もないようにと念じるばかり。

この谷川は、奥深く、陰気で、険しい、「遭難者の霊」が激しい水音に木霊しているような幻想を抱く・・・

谷川には鎖場、老木の丸太で作られた橋などを何度も横切って登って行かかなければならない。滝つぼに落ちまいと緊張の連続、この容赦ない緊張感と激しく流れ落ちる滝の水音に押しつぶされて、真っ青な顔色になってしまった仲間も出てきた。疲れなんか感じる余裕がない。滑ったりするところが多々あり、十分注意して脚を運んだ。

谷川を横切るときに脚を石から踏み外し、今日初めて履いた登山靴は水浸しにした仲間。



「この先死亡事故発生しています」との表示板があり、緊張感が横切る、「油断をしたら大怪我だ」と、鎖を握る手にも力が入る。滝を登りきったところで、「遭難の碑」があった。

やっとの思いで水場と別れ、急な登り始めのところではナメコの群生を見つけた。杖でナメコを落とすや否や一目散に拾い上げる、驚いたもんだ。つい先まで真っ青な顔色が消えうせ正常に戻ってしまう、元気なもんだ。あしハイキングの仲間は兵(つわもの)の集まりである。

しばらく急登を歩く、10時過ぎにようやく、比良スキー場跡に着いた。この辺りから青空が見える。八雲が原は、以前、比良ロープウェイ山上駅からハイキング気分に登れたが、ロープウェイが廃止となった今、どこの登山口から登っても、時間・距離とも手ごわい山となった。

目の前に頂上が見える、向かって登る。しばらくしてイブルキノコバにきた。ここで広谷への道が分岐する。アシウスギ(芦生杉)は、本州の日本海側気候の多雪地帯に自生するスギの変種だそうで、まっすぐ伸びずに、幹の下部から大枝を出すことが多いのが特徴のこと。

駐車場から登り始めて4時間を要し、ようやく頂上(1214m)に到着した。よく晴れていて、琵琶湖が眼下に見え、すばらしい眺め。遠くに蓬莱山が見えた。次から次へと登山者が元気よく駆け上がってくる。人気のある山である。ここで昼食をとり、12時30分には下山開始、この付近にトリカブトが咲いていた。下山は、細川越え、釣瓶岳方面から広谷ルートへ下った。広谷の標識を過ぎると、スゲ原と呼ばれる平坦な谷に出てきた。八ツ淵の滝のコースと違ってすごく歩きやすい。イブルキノコバへの分岐で、ガリバー青少年旅行村で会った尼崎市のグループに出会う。道はやがて広谷から離れて、山腹に向かう、大きなアシウスギが目立った。

30分ほど歩くと激しい水音が聞こえてきた、滝が見え、大きな岩が露出した大摺鉢に着いた。谷川の流れは特に激しい、石伝いに谷川を横切らなくてはいけない、命の鎖が着いているものの、ひとつ間違えば谷底に落ち、大きな怪我は覚悟しなくてはならない。各人緊張しながら鎖を片手に強く握り、対岸の手助けを受けながら、次々と渡ってゆく。

ところが、谷川を渡るとき、杖が邪魔になり、対岸に投げたが、投げ方が悪く、受け取ろうとした人がバランスを崩し、谷川に倒れ、しばらく起き上がることができず、前に述べた尼崎市からきた登山者の杖の助けを借りて、災難は免れた。

「遭難者の霊」(無念な叫び)が、陰気な谷川のなかで迷っているのかもしれない。今回もハプニングに出会った。次回、この山に登る時は、霊を供養してから登らなくちゃ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……

やっとのことでガリバー青少年旅行村に無事到着。

各自無事を喜び、笑顔がみられた。

帰りはマキノ「さらさ」で汗を流した。思いがけない緊張した山行を体験した。

なお、今回の『武奈ヶ岳奮闘記』に興味ある方は小泉さんYouTubeを見てください。

<https://www.youtube.com/watch?v=S1md7vDaspE>

武奈ヶ岳 遭難寸前

荒川勝巳

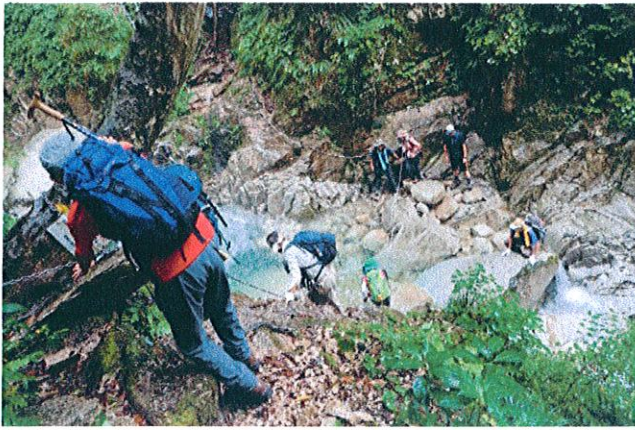
地獄のフタが一瞬あいた。遭難の一步手前までいった。ボクはヘソから上の胴体と右手のマサツだけで岩に張り付いていた。左手は空中に泳ぎ両足は急流で洗われていた。体勢を立て直そうにも頭が下の方を向いていてどうにもならない。近くにいた50歳ぐらいの女性がボクの右手を引っ張ってくれた。上手くいかない。もう一度、力を入れてくれた。少し動いてボクの頭も水平になった。ようやく身体を安全な位置に運べた。

9月25日武奈ヶ岳登山の最終局面であった。大摺鉢の沢を先頭で渡りきって、それで安心しきっていた。ストックの受け渡しの時、川に落ちたストックを取ろうとして水の中に突っ込んだのである。「とっさの判断であったが大間違いであった。とっさの判断は往々にして重大な局面を招く」

あのまま3mの急流を落ちれば大摺鉢の広い水たまりにはまる。そこを2~3秒で過ぎる。スリバチのフチの若干の自然石垣をこえてしまえば、数十mの滝である。不自然な体勢と浮力と水量を考えれば落下の可能性は高かったとみてよいだろう」

地獄のフタはいつも思いがけず開くようにみえる。しかしよく考えるとボクの中に慢心があった。自分もまたストックを手にして危ない所を渡っていたのである。ストックをリュックにしまい両手でクサリを握り渡るべきであった。その上で他のメンバーにも注意をうながすべきであった。助けてくれた女性とそのグループ尼崎の人とは朝の駐車場から挨拶を交わしていた。山頂でも下山中も前後していた。そういうご縁が重大局面で生きたことになる。山の中では、見知なる人とも仲良くすること。これも大事なことのひとつ。この文章のように、あった事おきた事をすぐに「チングルマ」に載せて体験の共有をはかる事も大切。

帰りの駐車場であらためて尼崎の女性に礼を述べた。きゃしゃな身体でなく力強い方であって本当に良かった。(なお八ツ淵滝めぐりコースは手入れがされていない。避けたほうが良い。)



入会しました。

宜しくお願ひ致します。

投稿

口に出して言う事にしよう。

荒川勝巳

翌日の新聞を見ると9月としては5年ぶりの猛暑日とあった。台風が近づく中イヤな暑さがあった。

9月4日、個人山行6人組は勝山市横倉から越前かぶとを経て大日山向かった。大日峠を越えて越前甲への急登をゆく。汗がどンドンふきだす。あらかじめ峠で水も飲み食料も口にしておいたがそれでも辛い。このへんはいつもの事と思っただが違うのはリュックが重いと感じた事である。いつもの装備なのにおかしいなおもった。

この急登はいつもひと息に登る。ところが先行した元気印3人が途中でひと休み中。あれ?と思っただが自分もここで休むことにした。ところが、ここでほんの少し吐き気がした。あれれ?がすぐにおさまった。この後、越前甲までの登りは辛かった。全員が大日山頂までゆくのは難しいなあと感じた(あとから思うとこの直感正しかった。)

それでも全員、越前甲山頂へ。いと息ついて果物など頂いたくと元気が出た。大日山まで結局全員到着・昼食の後、帰路を急ぐ。ところがiさんが遅れだした。30分行程のところで10分さらに待つが来ない。今までの経験では10分遅れまではノーマルである。10分オーバーでこれは何か起きたなと思うところ。tさんにリュックを預けてiさんが到着、ホットする。体調不良で一時はヘリ救助も有りかと思っただころ。こういう事もあり帰路メンバーチェックはいつも頻繁にしているのだが・・

あとから聞くと往路の越前甲に着くまでに皆辛いと感じていたという。適切なコース変更、短縮をこの時点ですべきであった。体調に異変を感じたり、いつも違う気持ちになったらお互いに具体的に口に出してみる事が必要である。(私も辛かったなあ口にしたが吐き気リュックが重く感じたとか皆が大日まではムリかも?とは言わなかった)

「編集後記」

標高1800mの雲上に沸く源泉。一円玉が三日で溶けてしまいます。

群馬県の秘境、万座温泉



pに送信ください。

畑中義和

△連載▽山岳会はさくら色

① 入会の章

荒川 勝巳

NHK前通りを横切り、職業安定所の前を曲がった所、飲み屋の二階にそれはありました。外から続く階段を二階にあがると、つきあたりがマージャン屋、右が福井労音（勤労者音楽協議会）、左が福井労山（勤労者山岳会）の部屋でした。

山岳会へ入ると決めていた私は迷わず左のドアを開けました。そのときの驚きは今も忘れられません。四畳半ばかりのタタミの部屋に若い女性ばかりが10人ぐらいつしりと座っています。男は私が開けたドアの陰に1人だけ。1970年のそのころは、どこの山岳会も紅一点あればいい方でした。ところが、この山岳会は圧倒的に女性なのです。

20才の私は勿論、うれしくなりました。あらためて女性たちを眺めまわすと美人ばかりなのです。夢でも見ているような気持ちになりました。（その訳はあとから分かりました。県庁や市役所、銀行、証券、損保、

商社、大手企業の支店など、福井駅前の優良事業所に勤めるビジネスガールが中心だったのです。全員、高卒でしたが、優秀な人ばかりでした。）

そのころの福井労山は4つの班に分かれていました。私の入ったのはアシ班。夏の北アルプスも行きますが、初心者中心の会でした。おりからの役員交代で新班長に県庁勤めの女性になりました。職場のバレーボール部でも活躍中というこのリーダーの下で、私の山岳会生活はすばらしいものになるはずでした。

山行の打ち合わせをする例会は月2回でした。ところが、新班長はこの日を最後に例会に出てこなくなったのです。班長がいなければ代わりの人が仕切ればよさそうなものですが、その気配もありません。集まっても何も決めず、散会することが3度続き、とうとう集まったのが4人になりました。この席に伝言で班長の退会が告げられました。原因は失恋らしいということでした。さて、どうするか。班長の成り手が誰もありません。私自身はまだ、会のメンバー

と山行を共にしたこともありません。話し合いは行き詰まりました。何とかするしかありません。「ほんなら、ボクがやるわ」と言ってしまったのです。

新班長になったといっても、会のメンバーから信頼を受けてなった訳ではありません。山行予定を組んだところ、参加したのは私と同じ新入会組の女性2人だけ。3人だけの山行がしばらく続き、それから少しずつ他の会員の参加が増えてきました。

山岳会はやっぱり、山へ行くことを続けなければいけない……あたり前ですが、私の得た第1の教訓でした。少し自信が出てきましたが、まだ山行に出てこない会員がたくさんいました。思い立ったのが機関紙の発行です。（この頃、すでに私は職場の労働組合の執行部におり、組合のニュースを担当していました。また、ゆきのした文学会という市民団体にも入っており、その宣伝組織の方法にも学んでいました。）

一人の会員に任せたアシ班ニュース創刊号は字がビッシリ。何がニュースの中心なのか、読みにくいばかりでさっぱり分かり

ません。思い切つて男女2人ずつの編集部を設け、私が編集長となりました。会報名も「チングルマ」と決め、山行のお知らせは勿論、話題コーナー、会員紹介欄も設けました。原稿は編集部全員が持ち寄り、ガリ切りは女性が先行。夜の9時ごろには女性を返し、あとは男2人で印刷までやりとげました。

「チングルマ」は例会に来た人には手渡し、欠席者には郵送しました。全員に必ず行き渡るようにしたのです。当然、郵送料が会の負担になります。反対する人もありました。「例会に出てこない人になんてお知らせニュースなんか郵送するんや。こんなことすると、わざわざ例会に足を運ぶ人がえんようになつてしまふ」と言います。

一見もつともらしい理屈ですが、これは進行する現実の前に打ち消されました。「チングルマ」を発行し出してから例会の参加人数は多くなり、山行の参加者も目に見えて増加していったのです。ニュース発行は力になるーこれが私の得た第2の教訓でした。

当時は若者の登山ブーム。急膨張して、そして空中分解寸前だったアシ班は、1年後には福井労山の中で最も活発な会になりました。班員も急増。例会になると室内はいっぱい。廊下や階段にまで人があふれる事態となり、2つの班に分けることになりました。

この頃には私は班内では「面白い人」ということでみんなの信頼を得ていました。美人女性ぞろいなのに、残念ながらモテた覚えはありません。

しかし、動けばさざ波の立つのは世の習い。私への反発の動きも頭をもたげてきたのです。
(つづく)

(季刊)

福井の年金者 119号

2016年 9月号